

爐邊閑語[承前]： 雜録

著者	鎌田，辰郎
雑誌名	龍南會雜誌
巻	2 4
ページ	3 2 - 4 1
発行年	1894-03-05
その他の言語のタイトル	爐邊閑語[承前]： 雜録
URL	http://hdl.handle.net/2298/4359

父ナル人

妻ナル女

あといふ所あらでは、用ひぬとなり、この「父ナル」「妻ナル」あといふは、皆うの位地をさしていふなり、「父ノ位ニアル人」「妻ノ地ニアル女」の意あり、この外、今一種の形容詞に用ふるナルも、ニアリより轉したるなるべし、うは、

美麗ナル花

自由ナル世界

あとの類あり、おれを解すれば、「美麗ニテアル花」「自由ニテアル世界」といふ程の心なり、俗に「美麗デアル」あといふは、「美麗ニテ」を約めたるによりて、濁るあり、右二種の用法を除きて、うの他の場合には、いつをも、今の俗語にいへる、「何々ト云フモノ」といふぞ正しき、あはを、これ程の詞にも、かはかり詞を費さずば、今人の目を覺ますこと、あたはずとは、淺ましき限あらずや、さてこの誤は、いづこより出來りしそ、と考ふるに、四書の佐藤點あに「孝弟也者」或は「也已」など、點をつけたるうみゆ、是らより誤を生したることゝうたはる、されば、これも、例の漢字を片はしより讀ませたるより、誤りたる詞とミゆれば、務めて、日用會話の正なきを從ひて、改むべし、さらでは、今後言文の調和をはかるに、故障を生ずること、少小あらざるべし、因に云、文法家には、ナルといふ詞を、二つに分ちて、一はニアルの約まりたるにて、漢字の在の字の心、一は、約まりたるにはあらで、漢字の爲の字の心として、説く人もあり、これに從ひて説くも、可なるべしや、

第三 厭世的觀念。

厭世的觀念とは何ぞや。曰く世を厭ひ、世を慕ふ、世を信せず、世に生活し得ざる思想なり。世と言ふは人間社會を意味して言ふなり。故に更言すれば人間社會を厭忌する心あり。是れは今や厭世的觀念の定義を下さんとは試みざるべし。この觀念の發生の源因と種類と、位置とを語らんと欲するあり。

凡そ物事は突然遭遇するより感じ易きはなし。特に苦痛の念に於て然りとす。暖衣飽食したる少年ありとせよ。かれは慈悲ある兩親を撫育せられ、朝に夕に苦の味を知らず、常に愛の泉に浴し、漸く長して學校に昇り、上位を占め、教師に愛せられ世の中のこと皆盡く喜ばしからるはあしと假定せよ。かれは露はとも憂苦を知らざらん、志望は遠く千里の「パラダイス」を眺め、春日尙ほ短かき心地やせん。而して月滿つれば歎げ、花咲けば散る、榮華の夢一度醒めて、かれに映し來る光景は果えて如何あるべき。花鳥風月盡く化して厭忌の種となり、天地遂に常暗とこやみの思あらん。かれは兩親を失ひ、愛を失ひ、捨小舟の如く漂々として浮世の潮流に棹さる可らず。この苦痛は突然として襲撃し來れるあり。旅なきぬ胸中に感ずる者は天地を厭はしく思ふ心あり。是に於て厭世の情勃々として禁す可らず、是れ厭世に陥るの一境遇あり。

第二は宗教其他平常誦讀する書籍等よりして厭世に陥る者あり。世にはかくして陥れるもの滔々として多し。宗教は如何なる者も皆超然的の者たるを免かれず、佛教、婆羅門教等は尤もなり、世間的と自稱する耶蘇教に於てもこの弊害あるは免かる可からざる所ならん。蓋し宗教は何れも皆世間以外の者に付て立脚の地を取らんと欲す。故に従て世を賤しむ、世を賤しむは已よ世を厭ふの始めに

して、遂に厭世に到る。看よ、ミが日本民族はいかに多くの厭世者を佛教に依りて産出されしか。又中世紀の歐洲はいかに夥多の厭世者を耶蘇教中に胚胎したりぞ。彼を思ひ、是を思はゞ思半ばに過ぎん。書籍の感化はまた甚しき者あり。悲觀的詩歌小説はさらあり、其他悲觀的哲學等皆を感動し易き人心には浸入して第二の天性を作爲するに到る。

バイロンの其母に於ける、クーパーの母の死に臨める、其他シェレーの如き、西行法師の如きシヨツペンハウエルの如き、皆ミが前述せる原因に基せる厭世家に非るはなし。バイロンをして「世界は大牢獄なり」と呼はしめ、「憂愁は智慧の教師あり、悲哀は智識あり」と歌はしめたるに到りたる原因は必畢彼を安んずべき家庭なきが爲めなりしならずや。或はクーパーをして亡き母の寫眞に接して胸中無限の悲哀を吐露したるは彼をして忽然逆境に到らしめたるが爲めに非る歟。シェレーの如きは社會に向つて思想を束縛されたるが如き厭世の基にあらすや。西行法師が秋の夕暮にも心なき身を哀み明月の夜にもうこちがほある我涙かなと嘆せしめたるは佛教の感化ありて然りしに非らずや。且やシヨツペンハウエルをして「人間は慾の奴隷あり、而して慾は無限あり、無限、有限を追ふ豈に満足することを得んや、已に満足せんば人世は厭ははきなり」と云はしめたるもかれの境遇と學習せる哲學とを然らしめたる所以に非ずや。

第三は人自身か先天的に有せる性質に基すべし、或は遺傳によるものもあるべし。「ハイポコンドリヤ」の如き、多く先天的あるにはあらざる歟。

以上は厭世的觀念の生する最たる原因に付て陳述したり、さらば是等の原因より發生し來れる厭世的觀念の種類は如何あるべきか、

人間は猶山嶺の如し、青樹翠蔓たる深山あれば、赭裸禿頭、燒石累累として草木繁生せざる火山も之れ有るべし。而して厭世的觀念を有する人間は恰も之れこの噴火山に似たり。其或者は沈痛鬱鬱或者は烈火炎々たり。されど胸中同じく不平の氣を包み、憂鬱の焰を燃すに至ては相異なることなし。かの鴨長明が、一生を草花と觀じ、葉末の露と比し、逝く川に悲を寄せ、飲くる月に哀をよせ、遂に

實あれば恐多く、貧しければ歎切あり。頼めば身他の奴とあり、人をはぐめば心恩愛につかはる。世にまたがへば身苦し、又従はねば狂へるに似たり。いつれの所をしめ、いかなるわざをえてか暫時もこの身を宿し、玉ゆらも心をあくさむべき。

と呼はしめたる如きは即ち火山中の噴火するものにあらず。さて、胸中に鬱積せしめて世に大呼せしむるに至らざる者あり。世界は彼か如き優美なる心胸には妖怪の如く、深淵の如く、虎狼の如く思はれたり。かれは狼の群に圍遶せられたる一羊に似たり。人世は常に牙鋭くしてかれを嚙むばかりに覺へぬ。鴨長明は之に逆つて戟を提げずして、自ら退ひて、白雲深くまて紅葉錦を染めたる深山に退き、かせぎを友として、悠々として方丈に閑日月を送りけり。其他兼好の如き、或は陶淵明の如き、釋迦の如き、かれ等は皆盡く、胸中無限の憂鬱を藏えて遂に人世を避けたり。さては歐州中世記に行はれたる僧院生活の如きは皆這般の厭世には非るか。或は西行法師の如き能因法師の如き、胸中別に悠々たる天地を想ふの人は遂に人世に逆抗して浪波を擧げんと試みず、自ら退き自ら去てて別天地を作るなり。

心なき身にも哀は知られけり 鴨立つ澤の秋の夕暮

こは實に厭世の極、一微動すらかれらの薄鼓膜には一大激動を覺へしむる者あり。

厭世家をして盡く憂愁悲嘆の人物とせしこと勿れ。同く厭世ありとも、其發ちて働作とある時に於ては兩者全く相反せるの有様をすら醸すあり。されば前述の厭世家は是れ即ち厭世家の一部分あり、馳せて放蕩に入り、躍りて恠激とあり、あるは發して憤怒とあり、罵言となり、嘲笑とあり、滑稽とある。所謂人生意の如くあらざるが爲めに焦れたるあり。このバイロンをして「暗黒」(Darkness)を歌はしめ、マンフレッドの口を藉らしめ、チロンの囚人を描らしめ、傷付ける獅子の如く、噴火せるエトナの如く、人生を寫倒叱咤したる胸中を尋ねれば、いかにその胸中の憂苦恨愁あるを知るにたらしむ。さてはかの李太白の如き鯨飲放肆、放歌高吟、人世の快樂酒中にありと云烈火の如く叫破せしめたるも又いかで厭世的觀念の變體なるを知らざらんや。あるは我が日本に於て、元祿年間に蔓生したる、西鶴の如き、下りて三馬の如き、平賀源内の如き、爲永春水の如き、厭世より變して道樂となり、滑稽とあり、嘲笑とあり、淫亂と變遷したるものならざらんや。唯に我日本のみあらで英國文學史上エリサベス朝の厭世的作家を見よ。ティンをして英國の十六世紀を目して「十六世紀は獅子の岩窟の如し」と叫ばしめたるものは果して何ぞや。この語は當時の民習風俗に向つて吐きたりとも之れ又當時の作家に當らざるものあらんや。彼等當時の作家の眼には、人間は恰も刻々崩壊たる山坂を輾轉する如く、果ては輾轉陥りて無限の深淵に沈淪し、生あく、氣なく、喜も、愛も盡く空虚ある渾沌界に到達する如く思はれしあり。多少人世の價值を看得したるセキスピヤに於てすら其絶命の作「テムペスト」(Tempest)中に

“We are such stuff

As dreams are made on, and our little life

Is rounded with a sleep."

と吐露せしむるに至りてはいかでか其他の小作家の發作が厭世的觀念より發露變形したるべきを知らざるべき。文學若し著者心中の感情思想を描寫するものならば、其當時に於ける、ヘン、マモンソンの如きセキスピヤの如き(セキスピヤは果して厭世家なりしやは大に攻究すべき問題あるべし。されどティンはセキスピヤの「ハムレット」及び「テムズ」又は(Measure for Measure)等より參考し來りて「With others, like Shakespeare, the idea of God scarcely makes its appearance; they see in our poor short human life only a dream, and beyond it the long sad sleep: for them death is the goal of life; at most a dark gulf, into which man plunges uncertain of the issue.」と斷言したり。さればわれも又暫くティンの説に従ふべし)マルローの如き、マスシガの如き其他幾多の當時の作家が吐露吼哮したる言語發作は皆凡て厭世的觀念ころ則ち是等の最大なる動機となりたれ。

樂天に近き厭世と絶對的厭世。

「世の中を思ひつけて見るときは散るころ花のさかりありけれ」とどわか所謂樂天に近き厭世にして「月影は入る山の端もつらかりきたへぬ光を見るよしもかた」とはわが所謂絶對的厭世なり。同じく之れ厭世なり、然れども一は消極的に觀して消極的に満足し他は消極的に觀して消極的に満足する能はざる者あり。これ兩者のけじめあり。人世を夢幻と觀し、飛鳥川と呼び、あるは「萬の事は頼む可らず」と云ひ、憂世と呼ぶの點に至りては兩者各々同じ。されど一は人世は變遷常なきが中より「無常」といふ「有常」を觀じ、他は「無常」を「無常」の儘に觀じ、悲痛するあり。月は滿つれば飲け、花は咲けば散る、さばれ前者は之がために「花は盛りに月は隈なきをのみ見るものなり」といふも、後者は空

しく人生の朝露を暮なひのこなり。われは是に至りて兩者の好摸範たる二個の厭世家を見出すあり。曰く吉田兼好曰く鴨長明是なり。兼好は是が所謂樂天に近き厭世家あり、長明は則ち絶對的厭世家あり。かの兼好が

秋の月はうぎりあくめでたきものなり。いつとても月はかくころれどと思ひぬかざらん人は、無下に心うかるべきことなり。

と云へるは實に無常中に「無常」なる有常を看取したるものにはあらざるか。世は實に變轉常あしれど、兼好法師は常なきが故に樂しきなりと思へるにあらすや。所謂「散るこそ花のさかりなりけれ」の趣明らかにかの法師の心中に萌せるなり。さらにかれ云はずや。

仇野の露消ゆる時あく、鳥部山の烟たちさらでのみ住まはつるならひあらばいかに物のあわれもをからん、世は定めなきこそいみじけれ。

ど。こは明らかとが言葉と符合するものあらすや。「世は定めなきこそいみじけれ」とは眞に「無常」中に「有常」を觀したるものにあらすや。兼好法師は實にこの「有常」「世は定めなきこそいみじけれ」といふ有常の上に安心立命の基を据置せしにはあらざるか。而して翻て鴨長明を看よ。かきかはが觀察せし所にては未だ這般の觀念あるを見ざるなり。かれは天變地災をまのあたりに觀察し、悲歎堪へがたく、遂に日野山の奥に跡をかくしたりとも、うは暫し外物の煩悶を脱かれし迄にて心中には露はとも兼好法師丈けの安心立命を看出さるゝあらすや。

いづれの所をしめ、いづるをよしてか、暫時もこの身をやとし、玉ゆらも心をなくさむ

と云へるは、何れはに、かれの心中の不安心を告白せる者にはあらざるか。しうのみならず、深山のかせぎを友とし、埋火をかき、こして老の寢覺のあかたしとし、いと静閑なる如きも、その心中には無限の擾亂を醸せるなり。うは

今草の庵を愛するも科とす、閑寂に着するも障なるべし。

と云へるにて火を見るよりも明瞭なるべし。所謂眞は絶對的厭世家にはあらざるか。

以上の二種の好摸範を支那に求めば、われは陶淵明は前者にして、屈原は後者に属すべきものありと答ゆべし。今は此の二者を説明するの必要あり、要するに、厭世の二段あること認識せらるれば可あり

われは已に厭世的觀念發生の原因と其種類とを述べぬ。さらば厭世的觀念の可否を述べしめよ。敢て公論を吐露せず、自論を述べべし。

人心の變化を至詳に觀察せし見よ。恰も地球の發育に類似する所あらざるか。渾沌たる世界漸く變じて大水時代となり、火團時代となりたる如く、人心は始めには意のみ能く發達し、次ぎに情に移り、詩起り、詞出て、恰も地球に至る所に噴火山の噴出ありたると趣を同ふせり。而して第十九世紀の今日に至りては萬國滔々として智に向ふ。之れ漸く世界の文明が智情意の三者を圓滿に兼併せんとするの傾向にあらずや。されば厭世的觀念あるものは人心未だ尙ほ情の境界に彷徨するの際發生するものにはあらざる。所謂感情よりして起るものにはあらざるか。人生には實に憂苦悲歎すべき事多かる。されど之を理に訴ゆることをあらずして情一偏より觀察せんとするは厭世家の常あり。人生には暗黒の面と光明の面とこれあるべし。さは暗黒あるか故に厭忌するは未だ以てわれらの取るべき

方法にはあらざるべし。苟も人生を重んじ、人間の價值を知得する人士あらんには寧ろ飄忽として人世を去り、あると放肆淫亂に流れ、あるは憂愁に沈淪して又起つ能はざるに至るべけんや。靜かに思ひ見よ、天地到る處に美神潛み、惠露滴る。杖を曳いて三春の景を看よ、胡蝶は春風に翻て天地を樂み、雲雀は蒼空に囀じて天恩を壽く。銀河野に横はり、綠野天に接す。晴夜蒼穹を仰げば星宿各天位を盡し、大月人心を照らして明らかり。かのテニソンを見よ、親友ハラムの天死を悲歎し、深淵に入り、大海に沈み、遂に無限の光明を發見したる如きは眞に人生の眞意義にはあらざるか。之を要するに厭世的觀念ある者は變則的觀察あり。悲哀にして嗚咽すべき時あればとて直に以て「世界は大牢獄あり」と呼ぶは大早計にあらすや。思ふに厭世家は餘りに人世に向て注文の過大あるものなり。於是乎其注文に満たされは則ち厭忌すべきものありと叫ぶ。さらば之を云はしめばかれ等はエモルソンの所謂世に負けたる者なり。幾多の人間は厭世的觀念の爲めに身体を誤りたり。我日本民族の如き佛教の厭世的觀念の爲め、許多の精力を滅殺せらるゝしにあらすや。甚だしきに至りては實に人身を自殺せしめ犠牲に供するものあるに非ずや。印度土人の迷信の如き其好適例ありとす。

然りと雖ども、厭世的觀念も肉慾情念をのこ違ふし、名奔利走空しく人世を浪費し、理想なく、徳義廉恥なき凡俗者流に超越すること數等あるべし。思ふに厭世的觀念は人間が一段階を進めたる者あり、更に進んで眞正の樂天主義に到らんと欲せば必ず二の段階を踏まざる可らず。さらば厭世的觀念も又一概に遠くへくものにもあらざるべし。

前號正誤

二十四頁十七行(Absolute Ipea)は(Abstract Idea)の誤

十九頁七行「咽ばえむる」の間「思想を與ふる」の六字を脱す。

讀書の樂

雲溪漁史

深山幽谷の邊より遷り來りて、梅が香に啼く鶯も、觀じ來れば樂めるが如き。芳草原頭東風に嘶ゆる牧馬も、觀じ來れば樂あるが如し。水に鳴く夏の蛙も、露にすだく秋の蟲も、觀じ來れば樂あるが如き。賤が伏屋の額れ籬に笑を含む菊の花も、觀じ來れば樂あるが如し。げに樂は何物にも缺くべからざるものにあらざる。もやこれあかりせば、如何に社會はありつらむ。色もあく、香もあく、味もあく、一日も以て生活するに堪へざるべし。思ひ見よ、深山遠く薪を拾ふ樵夫には『山行歌』あり。波路遙かに楫を操つる舟子には『舟子歌』あるにあらざるや。霖雨濛々として晝尙は暗き時、水田に脛を没して、早秧を挿むものは、『田植歌』を歌ふて樂み、花落ちて鶯聲老へ、新緑陰をまして、前林靜なる頃しも、獨り營々として茶を摘むものは、『茶摘歌』を歌ふて樂むにあらざるや。

彼の富貴に傲るもの、富貴を求むるもの、名利を得たりとて驕るもの、名利を得んとて走るもの、彼等果して如何なる樂を有し、或は有せんと欲する乎。彼の大厦高樓に坐し、酒池肉林に遊び、紅裙紫袖を侍べらせ、絲竹管絃の音に浮るゝを以て樂とあす乎。げにや、富貴ある間は、或は樂きまともあらん。名利を持する間は、或は樂しきまともあらん。されど汝等知らざる乎。富貴は水の泡の如く直に消ゆるものあるを、名利は風の前の燈よりも尙は危きものあるを。實に是等は以て永久の樂となすと能はざるなり。否な是等は眞個俗界の樂にして、其醜、其俗、其穢、其陋、厭ふべく、賤しむべく、恥づべく、笑ふべきの甚だしきものにあらざして何ぞ。果して然らば、貴きも、賤きも、貧きも、富めるも、